

令和 3 年 6 月 2 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23072

研究課題名（和文）大正・昭和文学における外地人表象の研究：朝鮮人表象を中心に

研究課題名（英文）Study of literary and media representations of Koreans in Taisho and Showa Japan

研究代表者

堀井 一摩（HORI, Kazuma）

東京大学・大学院総合文化研究科・助教

研究者番号：70847467

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、三・一独立運動から関東大震災にいたるまでのメディアおよび文学における朝鮮人表象を調査し、関東大震災時における朝鮮人虐殺の心理的背景となった日本人の被害妄想のメカニズムを明らかにした。また、朝鮮人虐殺を描いた文学作品を包括的に検討し、労働問題の不在という問題点を指摘した。さらに、金子文子のテキストを中心に、従来見過ごされがちであった植民地的抑圧に対する抵抗と、日本人と朝鮮人の連帯の可能性を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、三・一独立運動から関東大震災にいたるまでの朝鮮人表象の調査を通して朝鮮人虐殺の背後にある情動の働きを解明するとともに、朝鮮人虐殺を作品化したテキストを包括的に分析・評価することで、震災後文学の問題点を照らし出すことができた。また、被抑圧者の抵抗運動や民族間の連帯に光を当てることで、従来のポストコロナル研究が前提としてきた宗主国と植民地との固定的な「支配/従属」の関係を捉え直すことができた。本研究で得られた知見は、狭義の文学研究を超えて、歴史修正主義や外国人排斥などの現代の日本社会が抱えているアクチュアルな問題を再考するうえで重要な示唆を与えるものであると考える。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the representation of Koreans in the media and literature from the March 1st Movement to the Great Kanto Earthquake, and reveals the mechanism of paranoia of Japanese people, which was the underlying psychological background of the Korean massacre during the Great Kanto Earthquake. Through comprehensive review of literary works depicting the massacre of Koreans, it also brings to light the problem of the absence of labor issues in these works. Furthermore, focusing on the autobiography and essays by Kaneko Fumiko, this study discusses the resistance to colonial oppression and the possibility of solidarity between Japanese and Koreans, which have tended to be overlooked in previous studies.

研究分野：日本文学

キーワード：朝鮮人表象 三・一独立運動 関東大震災 朝鮮人虐殺 震災後文学 パラノイア ト라우マ 植民地主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、韓国併合から関東大震災に至るまでの朝鮮人表象を分析し、関東大震災時における朝鮮人虐殺の背景を探ると同時に、同時期の文学との関連性を探究するものである。関東大震災時の朝鮮人虐殺に関しては、すでに多くの研究の蓄積がある。姜徳相(『関東大震災・虐殺の記憶』青丘文化社、2003年)や山田昭次(『関東大震災時の朝鮮人虐殺—その国家責任と民衆責任』創史社、2003年)らの実証的研究によって、流言を拡散し、虐殺を煽動・実行した主体とその経緯が明らかにされてきた。朝鮮人をめぐる誤情報の流布に官憲が関与しており、新聞報道も流言を拡散し、虐殺を助長したことが判明している。また、文学における朝鮮人表象の重要な先行研究として、明治期から戦後に至るまで、文学言説が「朝鮮」をいかなる他者として描いてきたかを追跡した中根隆行『朝鮮 表象の文化誌—近代日本と他者をめぐる知の植民地化』(新曜社、2004年)がある。

しかし、従来の研究では、関東大震災時の朝鮮人虐殺を準備した心理的背景についていまだ解明されていない。大量虐殺という事態は、震災以前から内地の日本人が抱いていた、朝鮮人に対するゼノフォビア(外国人嫌悪)とパラノイア(被害妄想)を考慮に入れなければ、十分に説明できない。また、朝鮮人虐殺を描いた文学作品の研究も手薄である。特定の作家が震災時に書き残した証言に研究が集中しがちであり、秋田雨雀・江馬修らによる朝鮮人虐殺の作品化について包括的な研究や評価はほとんどなされてこなかった。さらに、植民地朝鮮の民衆や在日朝鮮人たちが帝国日本の抑圧と暴力に晒された存在であることは論を俟たないが、「外地人」を抵抗の契機を奪われた客体として記述しがちであった。

こうした問題意識にしたがって、本研究は次のような目的を設定した。

## 2. 研究の目的

(1) まず、三・一独立運動後の「不逞鮮人」言説の分析を通して、朝鮮人虐殺の背景となった朝鮮人に対する認識と情動のメカニズムを解明する。「不逞鮮人」とは、独立運動を行う朝鮮人に対して付けられた蔑称であり、1919年の三・一独立運動後の朝鮮人認識の支配的枠組みとなった。日本は1910年の韓国併合条約で朝鮮半島を実質的に植民地化した。ところが、1923年の関東大震災では、「不逞鮮人」の放火や暴動の流言が広がり、恐怖と憎悪とに駆られた国民は各地で自警団を組織し、多数の朝鮮人や中国人を虐殺した。日韓併合時には、日本の新たな「家族」として迎えられた朝鮮人は、いかなる経緯で「不逞鮮人」という恐怖と憎悪の表象へと転換したのか、「不逞鮮人」をめぐる認識と情動が朝鮮人虐殺にどのような形で作用したのかという問題を解明することを、第一の目的とする。

(2) 三・一独立運動と関東大震災時の朝鮮人虐殺を主題とする文学作品を分析することで、それが当時の支配的な朝鮮人認識をどのように相対化し、批評しているかを測定する。朝鮮人虐殺を作品化した文学テクストとして、佐藤春夫「魔鳥」(『中央公論』1923年10月)、秋田雨雀「骸骨の舞跳」(『演劇新潮』1924年4月)と江馬修「羊の怒る時」(『台湾日日新報』1924年10月～25年3月)同「奇蹟」(『プロレタリア芸術』1928年1月)、佐野袈裟美「混乱の巷」(『文藝戦線』1924年9月)などがある。これらの作品が日本人の朝鮮人認識をどのように相対化しているのか、朝鮮人虐殺に対していかなる批判点を構築しているのかを分析することを、第二の目的とする。

(3) 金子文子・朴烈をはじめとする、「不逞」と名指され、また自ら名乗った者たちの言語戦略を分析することで、植民地主義に対する抵抗の実態を解明する。彼ら/彼女らは日本の植民地支配に対してどのような抗議の声をあげ、また「不逞鮮人」像をどのように読み換えていこうとしたのかを、雑誌分析を通じて明らかにする。「不逞」の者たちの抵抗実践を解明することを通じて、従来のポストコロニアル研究が前提としてきた植民者(日本人)と被植民者(朝鮮人)との間の「支配/被支配」の固定的関係を相対化することを、第三の目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 三・一独立運動後の「不逞鮮人」報道や関連資料の調査と分析  
関東大震災時の資料は、緑陰書房から刊行された『関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料』シリーズに網羅されているが、震災以前の「不逞鮮人」言説に関しては資料の整備が手薄である。そこで、主要全国紙・総合誌と、朝鮮内で発行された新聞から「不逞鮮人」言説資料を収集し、データベース化したうえで、大正期における朝鮮人表象の構造を分析する。

### (2) 中西伊之助・佐藤春夫・秋田雨雀・金子文子らの作品分析

(1)の研究成果をふまえたうえで、大正期の文学における朝鮮人表象とその戦略を分析する。三・一独立運動後の朝鮮人認識を批評した中西伊之助「不逞鮮人」(『改造』1922年9月)、関東

大震災時の朝鮮人虐殺を扱った佐藤春夫「魔鳥」(『中央公論』1923年10月)、秋田雨雀「骸骨の舞跳」(『演劇新潮』1924年4月)と江馬修「羊の怒る時」(『台湾日日新報』1924年10月～25年3月)同「奇蹟」(『プロレタリア芸術』1928年1月)金子文子と朴烈らによる雑誌『黒涛』『太い鮮人』『現社会』などを主な対象とし、その言語戦略を分析する。作品分析に際して、ホロコースト研究やトラウマ研究の理論的成果を摂取し、援用を試みる。

以上のような方法に従って研究を進めた結果、現在までに以下の成果を得ることができた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 「不逞鮮人」の言説効果に関する研究

国立国会図書館や新聞のオンライン記事データベースを利用して、朝鮮人に関する新聞記事の複写・スキャンを行い、三・一運動から関東大震災にいたるまでの朝鮮人表象の傾向を分析した。また、滋賀県立大学の朴慶植文庫で調査を行い、関東大震災時の朝鮮人虐殺関連の資料を収集し、「内地」における朝鮮人表象の分析を行った。

「不逞鮮人」とは、三・一運動後の日本の公文書やメディアで急速に流通し、普及した民族差別的な呼称である。アンドレ・ヘイグは、「不逞鮮人」とは「一九一九年の三・一朝鮮独立運動を受けて、新たに形成された朝鮮民族のアンチ・コロニアル勢力を凶暴なテロリストとして表象する様式の主要な現れ」であったと指摘している(アンドレ・ヘイグ「中西伊之助と大正期日本の「不逞鮮人」へのまなざし—大衆ディスクールとコロニアル言説の転覆」『立命館言語文化研究』2011年1月)。それは、独立運動に関わる朝鮮人を「陰謀」「反逆」「破壊」といった恐怖を喚起する語彙でフレーミングし、排除の対象とするものであった。さらに、「不逞鮮人」は独立運動家だけでなく朝鮮人一般にも拡張され、日本の植民地統治に不平を抱き、反逆をたくらむ朝鮮人という意味で使用されていることも確認した。このようなイメージがメディアで流布されることによって三・一独立運動後の朝鮮人認識を決定づけ、関東大震災時の朝鮮人虐殺をもたらす日本人の心理的背景となったと考えられる。

しかし、三・一独立運動の新聞報道の調査の結果、「不逞鮮人」言説は、従来考えられてきたように恐怖を呼び起こす機能をもつだけでなく、植民地統治の正当性を担保し、「内地人」に安寧をもたらす機能をも果たしていることが明らかになった。三・一独立運動は平和的示威運動として開始されたものであり、総督府の弾圧や虐殺が強行されるにつれて暴動的形態をとる抵抗運動に変化したことが朝鮮近代史の領域で明らかにされている(朴慶植『朝鮮三・一独立運動』平凡社、1976年)。ところが、三・一独立運動を報じたメディアでは、平和運動の理念を記した三・一独立宣言は報道されず、総督府による過酷な弾圧や虐殺も隠蔽されていた。そこでは、キリスト教宣教師や過激化した学生が先導した「騒擾」「暴動」と報じられ、「不逞」の暴徒による運動の暴動的形態のみが誇張されている。メディアで形成された「不逞鮮人」言説は、三・一運動の平和的な運動形態と植民地当局による暴力的な鎮圧を隠蔽し、「不逞鮮人」の「騒擾」「暴動」に差し替えていた。これによって、「不逞鮮人」言説は、実際は加害者・抑圧者であった植民地当局や朝鮮の「内地人」を被害者に仕立て上げ、日本の植民地統治の正当性を担保するように機能していたのである。

本研究は、こうした朝鮮人表象に対する対抗言説として中西伊之助の中編「不逞鮮人」(『改造』1922年9月)を取り上げた。この小説は、三・一運動直後の植民地朝鮮を背景として、日本人青年が抗日独立運動の首魁の家を訪れ、「不逞鮮人」に襲撃される幻影に怯えながら、それが自分の被害妄想であったことを悟り、自民族の罪を認識する物語である。この作品の分析を通じて、独立運動を暴力によって制圧した日本人の加害性が否認され、それが朝鮮人に投影された結果、「不逞鮮人」の襲撃という被害妄想が形成されることを明らかにした。このように加害の否認と投影によって形成される被害妄想のメカニズムは、朝鮮人虐殺の背後にある情動の働きを解明するものであると同時に、歴史修正主義や在日朝鮮人に対するヘイトスピーチなどのアクチュアルな問題に応用可能な視点である。

以上の成果の一部は、『国民国家と不気味なもの—日露戦後文学の「うちなる他者像」』(新曜社、2000年)の終章に反映させている。

##### (2) 朝鮮人虐殺を描いた作品の研究

秋田雨雀「骸骨の舞跳」(『演劇新潮』1924年4月)、佐野袈裟美「混乱の巷」(『文藝戦線』1924年9月)を中心としたプロレタリア劇における朝鮮人虐殺表象を検討した。朝鮮人虐殺の経済的背景として、第一次大戦以後、内地に大量に流入し、安価な労働力として雇用されていた外地の労働者と、朝鮮人労働者に職を奪われつつあった日本の労働者と間の軋轢があり、朝鮮人虐殺に日本の労働者階級が主体的に関わっていたことが指摘されている(姜徳相『新装版 関東大震災』新幹社、2020年)。しかし、秋田雨雀「骸骨の舞跳」は、民族を越えたヒューマンイズムの立場から朝鮮人虐殺を批判してはいるものの、ジェノサイドを日本人のナショナリズムの問題に還元し、虐殺の経済的・政治的・心理的背景を捨象している。また、佐野袈裟美「混乱の巷」では、労働者が虐殺を批判する社会主義者と連帯する存在として理想化されており、関東大震災時において労働者が朝鮮人の抑圧者として働いた事実が不可視化されている。このように、これらの作品は、虐殺を描くにあたって労働者の共犯性や植民地支配の問題から目を逸らし、事態を矮小化している点に限界がある。

他方、平沢計七「非逃避者」(『労働立国』1923年1月)は、関東大震災前に書かれた戯曲であるが、ジェノサイドの素地となった第一次大戦後の外国人労働者排斥問題を主題としている。この作品は、日本人労働者と中国人労働者との軋轢を、階級・民族・ジェンダーが複雑に絡み合ったインターセクショナルな問題として析出している。作品分析を通じて、「非逃避者」が、その後起こる関東大震災時の朝鮮人・中国人虐殺の背景を鋭く析出しながら、労働問題解決の道筋を模索していることを確認した。

本研究を通じて、これまで包括的に論じられなかった朝鮮人虐殺文学の問題点が明らかになり、今後の議論の土台を作ることができた。

### (3) 金子文子の抵抗運動の研究

金子文子が雑誌『黒濤』『太い鮮人』に発表した論説、および死後に出版された自伝『何が私をこっさせたか』(春秋社、1931年)を分析し、朴烈と連帯した文子の抵抗戦略について考察した。金子文子は、武断統治時代の植民地朝鮮での経験を通して、朝鮮人が「内地人」によって家畜のように扱われている点を問題化している。テキスト分析を通して、彼女が、「動物化」された朝鮮人の痛みと共振する回路を発見し、個人を「家畜化」するうち(国家、家)の思想を批判して、個と個の対等な関係にもとづく新たな「うち」を模索していたことを明らかにした。本研究を通じて、日本人と朝鮮人の連帯の可能性や、植民地における抑圧に対する抵抗のあり方を示すことができた。以上の研究成果を、「ネーションとドメスティケーション—大杉栄と金子文子の動物論」(木村朗子/アンヌ・パヤール=坂井編著『世界文学としての震災後文学』明石書店、2021年)として発表した。

他方、新型コロナウイルス感染症の拡大のために、韓国の朴烈義士記念館での調査が遂行できず、朴烈を中心とした在日朝鮮人による抵抗運動の解明には及ばなかった。今後は日本で入手できる資料(雑誌『黒濤』『太い鮮人』『現社会』や朴烈事件の裁判記録)の分析によって、朴の言語戦略を明らかにしたい。

### (4) 中国・台湾の外地人表象の研究

前述のように、感染症のパンデミックのため、韓国ソウル市の韓国国立中央図書館、韓国国家記録院、慶北聞慶の朴烈義士記念館での資料収集が叶わなかった。そのため、本研究、ならびにホロコースト研究やトラウマ研究の理論的摂取で得られた知見を、中国や台湾など朝鮮以外の外地人表象の分析に援用した。

この研究成果のひとつが、「反復強迫する動物 夢野久作『ドグラ・マグラ』におけるレイシズムをめぐって」(『言語・情報・テキスト』2020年12月)である。夢野久作『ドグラ・マグラ』は、主人公の犯罪の素因を彼の祖先である中国人の変態心理に帰する人種差別的な言説を含んでいる。しかし、トラウマ理論を援用した作品分析によって、このようなレイシズムが、小説に書き込まれた「心理遺伝」論そのものによって自壊することを明らかにした。

また、佐藤春夫が台湾旅行での見聞をもとに書いた小説「魔鳥」と「女誠扇綺譚」を取り上げ、日本の植民地支配に対する台湾の先住民と漢民族の抵抗の契機を読み解いた。いずれの小説においても、伝説や噂話で伝承される怪異や迷信は「文明」が克服すべき「原始的なもの」と位置づけられている。しかし、小説に取り入れられたフォークロアの分析を通じて、「魔鳥」では、台湾原住民が語る伝説が総督府の暴力に対する抵抗を呼び起こすメディアとして機能し、「女誠扇綺譚」では、台湾民衆の噂話が植民地における権力批判として働き、被抑圧民族の怨嗟の声を語り伝えていることを明らかにした。この研究成果は、「怪異と迷信のフォークロア—佐藤春夫「魔鳥」「女誠扇綺譚」における植民地的不気味なもの」を、青弓社より刊行される『近代日本における「怪異」とナショナリズム』に発表予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 堀井一摩	4. 巻 26
2. 論文標題 「性差別に祟る亡霊 泉鏡花「沼夫人」における日露戦争と女性国民」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『言語・情報・テキスト』	6. 最初と最後の頁 pp. 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀井一摩	4. 巻 13
2. 論文標題 「動物のアナキズム 大杉栄と芥川龍之介「羅生門」をめぐって」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『芥川龍之介研究』	6. 最初と最後の頁 pp. 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀井一摩	4. 巻 27
2. 論文標題 「反復強迫する動物 夢野久作『ドグラ・マグラ』におけるレイシズムをめぐって」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語・情報・テキスト』	6. 最初と最後の頁 pp. 105-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 堀井一摩
2. 発表標題 「コロナル・ゴーストが現れるとき 中西伊之助「不逞鮮人」をめぐって」
3. 学会等名 第7回東アジアと同時代日本語文学フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 堀井 一摩	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 416
3. 書名 国民国家と不気味なもの	

1. 著者名 木村 朗子、アンヌ・バヤール=坂井	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 520
3. 書名 世界文学としての 震災後文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------